

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.146

多摩風土記（八王子のラクダ）

川添裕著『江戸にラクダがやって来た』（二〇二二年岩波書店）は、文政四年（一八二一年）に日本に来たヒトコブラクダの足跡を記す。同書は同八年八王子へ来たこと、千人同心組頭塩野適齋の『桑都日記』に「福全院境内に於いて之を観物す。」との記録があることに触れている。ラクダは各地で評判となり、落語の「らくだ」の成立に繋がったという。（健介）



有馬朗人

代表作100句をとおして

俳人有馬朗人の全貌に迫る

津久井紀代

有馬朗人の作品は「俳句は詩である」ことから発信された。少年時代は詩人になろうと思ったほど詩に夢中になった。特に詩誌『荒地』のメンバーの影響を受けた。第一句集『母国』の句には

手袋を落とし自分の記憶までも
水中花誰か死ぬかも知れぬ夜も
砂丘の女手袋ぬげば海盤車になる
初蝶の輝く翼受胎告ぐ
母の日が母の日傘の中にある
夏服を着よランプのジャック達

蜥蜴走り去り時計の針となる

烏瓜もてばモジリアニイの女

二兎を追ふほかなし極寒の水を飲み

やがて来る者に晩秋の椅子一つ

など、「現代詩」を盛んに俳句に取り入れた。「芸術は非凡でなければならぬ」とし、日常を回避することから発信された。T・S・エリオットなどの英詩に親しみ、いかに俳句に取り入れるかに苦慮した。

特に「西脇順三郎は私の俳句の原点」と述べている。

今までの日本にはみられない新しさ、特に幻想性にこころを奪われたのである。

喜雨一刻女神の像の乳ぬらす

寶石にまぎれ何時より花の種

マドリッドでの作。

早ばつがつづいた後に降る雨を喜雨、または慈雨と言う。夏の季語である。その喜雨が女神の像の乳を濡らした、と云うの

である。女神の像では平凡になる。乳を濡らしたところに喜雨との照応があり、発見がある。女神を現実のものに引き寄せ、メルヘンの世界を描く、ここに、朗人の工夫が見て取れる。

この句は西脇順三郎の『あむばるわりあ』の三番目の詩「雨」「南風は柔い女神をもたらしした 青銅を濡らした 噴水を濡らした」を下敷に書かれたものである。

二句目は西脇順三郎の『あむばるわりあ』最初の詩「天気」の一行目「覆された宝石のやうな朝」を踏まえたもの。これは第二句集『知命』のなかに収められている。

『母国』『知命』からは「季感」はあまり感じられない。「現代詩」を盛んに俳句の中に取り入れたという理由である。

この頃、俳句においては西東三鬼に憧れた時代でもあった。三鬼の

寒夜明け赤い造花が又も在る

などの非情ともとれる即物的手法は朗人の感性をくすぐるに充分であったのだ。

俳壇の周りを見渡しても詩を俳句に取り入れるという発想は見当たらない。この大胆な発想が俳壇に受け入れなかったことは今でも残念に思う。これを理解する人がいなかった、と言えば言い過ぎであろうか。

『母国』に発表された作品は、五十年経った今、多くの人の心をくすぐり愛唱され続けている。そして五十年経ったいま、これを越える新人は現れていないのではないだろうか。『母国』は俳壇の為にも、もっと取り上げられるべきものであったと思

う。

朗人が東京大学理学部に入学したときに、工学部教授の室を訪ね、山口青邨の門を叩き、「夏草」に入門したのである。ある日神田の古本屋で見つけた、青邨の『雪国』に収めてある、独逸留学の時の作品に刺激を受けたものである。言い換えれば海外詠における西欧文学に惹かれたのである。

たんば、や長江濁るとこしなへ

山口青邨

舞姫はリラの花よりも濃く匂ふ

同

ここに立つ受難キリスト葡萄摘

同

など、である。

山口青邨が同じ大学の教授であったことも朗人が終生山口青邨を師と仰ぎ、いかなる誘いにも応じなかったことの理由でもあったが、朗人は青邨の生きざまに惹かれたのではないだろうか、同門の一人としてそう思うのである。

幼い頃父を失った朗人にとって青邨は人生の父であったのだ。青邨亡きあとの朗人の俳句には

混沌の二字を大きく古日記

初昔何かを忘れ来し思ひ

どこをどう間違ひて来し年の暮

流寓の日日や空き缶蹴れば秋

などに見られるように混沌とした気持ちを書くことが多くなったように思う。

朗人は

ごろすけほう弥勒の世までまだ遠い
という句を残して逝かれてしまった。九十歳であった。

有馬朗人句抄

初夏の夜を海底としてバレイリーナ
露を置く野のキリストの足の釘
あかねさす近江の国の飾白
銀杏散る万巻の書の頁より
根の国のこの魴鯉のつらがまへ
天衣にも縫目ありしや落し文
漱石の脳沈みある晩夏かな
芽吹き遅き櫛叩きていざ去らむ
長崎の坂動き出す三日かな
紫陽花やおたきは遠しいねも又
ひざにゐる猫涅槃図に間に合はず
混沌の二字を大きく古日記
ソーダ水巴里に老いたる女かな
人影のアウシュヴィッツへ行く花野
天を呼ぶ鶴初声の白さかな
胸白く秋の燕となりにけり
あの窓に父の魂魄夕桜
葛切に透けて幼き日の山河

「知命」
〃
「天命」
〃
「耳順」
〃
『立志』
〃
「不稀」
〃
「分光」
〃
「鵬翼」
〃
「流転」
〃
「黙示」
〃

有馬朗人氏プロフィール

有馬朗人（ありま ありま）
朗人（一九三〇年九月一三日～二〇二〇年二月六日）は、日本の物理学者（原子核物理学）、俳人、政治家。東京大学名誉教授、財団法人日本科学技術振興財団会長、科学技術館館長、武蔵学園学園長、公立大学法人静岡文化芸術大学理事長、文化勲章受章者。国立大学協会会長、東京大学総長、理化学研究所理事長、参議院議員、文部大臣、科学技術庁長官などを歴任した。

俳人として

一九四五年より作句。一九四六年に「ホトトギス」に初入選。東大に入学した一九五〇年に「夏草」に入会し、山口青邨に師事。また東大ホトトギス会にも入会。一九五三年「夏草」同人。高橋沐石らと「子午線」を創刊。一九九〇年「天為」を創刊・主宰。東大俳句会の指導も行う。二〇〇六年より一二年まで蛇笏賞選者。俳人協会顧問、全国俳誌協会顧問、国際俳句交流協会会長、東京都俳句連盟会長。

一九八七年「天為」で第27回俳人協会賞、二〇〇四年「不稀」で第7回加藤郁乎賞、二〇〇七年「分光」で第3回詩歌句大賞、二〇一二年「流転」で第28回詩歌文学館賞受賞。また二〇〇五年一月二二日には東大本郷校舎構内の三四郎池畔に山口青邨句碑と並んで「銀杏散る」の句碑が建立された。二〇一八年「黙示」で蛇笏賞。

あけぼの集

汽笛なる三月十日隅田川八王子青木 隆
 天津より春のみ雪に浄められ東久留米青村 萌生
 目に入れてどうにも痛きこどもの日八王子赤野 四羽
 をちこちに光こぼして百千鳥国分寺秋山ふみ子
 鬼眠る我が蓬萊は大江山多摩足立喜美子
 嫁ぐ子の窓ひろびろと豆はやす小平安達 昌代
 無理数も逆数もあり寒の明け清瀬穴原 達治
 大の字に死海に浮いて春だった稲城新井 温子
 木目込みの干支も仲間にも古雛八王子荒川勢津子
 一筋の川うるおして雨水なり町田有坂 花野
 野うさぎに火薬のにおい弥生尽国分寺安西 篤
 疑問符はいつもモノクロ夕桜足立飯田 和子
 二病に勝ち戻って来ました春の庭東久留米飯田 玉記
 立春や女子大学の最寄駅多摩石川 春兎
 山茱萸や偏頭痛を散らす術小平石橋いろり
 店を閉じ何処へ消えたか三月尽練馬石原 俊彦
 郁子の花蔓絡みチャットGPT八王子市川 春蘭
 冬夕焼明日良きことありそうな青梅一ノ瀬順子

絵手紙のことの始めは花見月狛江伊東 類
 花ミモザ矢鱈尾を振る門の犬町田稲吉 豊
 山笑ふ大画布を貼り老い疲れ町田今田 述
 友はキャリアにノンキャリは新茶汲み武蔵野内田 牧人
 花蘇枋濃ければうづく胸の奥武蔵野江中 真弓
 何億年眠ればよいか詩語の春府中大井 恒行
 好きな人閉じこめており紙風船日野大槻 正茂
 寒月に見透かされたる胸の内八王子大谷みどり
 秋おちてつがいの蝶のふるへかな立川大友 恭子
 菜の花の平らな午後のレモンティー川崎大西 恵
 ポツキーの箱開く音や春の海三鷹大森 敦夫
 駅春寒怖ず怖ず押され車椅子昭島岡崎たかね
 裏口に令和の戦前厚かまし武蔵野岡崎 万寿
 春の日の太刀尾巻尾と犬比べ三鷹小川 葉子
 草萌や海辺に向かふバスを待つ川崎尾崎 太郎
 鹿威し水零れ落ち寒明くる昭島尾関 英正
 人違いされて街角春近し稲城門野ミキ子
 プーチンへ届かぬ豆や鬼は外日野亀津ひのとり

あけぼの集

冬ざれに立ち続けるか渋沢翁 西東京河 順子
あれ！薬呑んだかなと聞かれ雪の中 立 川川島 一夫
是非はプーチンの脳核は人類忌大 田川名つぎお
半仙戯老女に翼あるごとく 清瀬神崎 幸子
古墳から幽かな寢息夜の新樹小 平城内 明子
朽ちかかるベンチの骨に緑雨かな 町田菊池美智枝
默契の石州和紙に漉きこんで 日野木村 菊
ポイントにつられ買物日脚のぶ 武蔵野高坂 栄子
筍の皮右に左に剥き分ける 西東京幸村 睦子
母危篤三度目の夜寒に入る 府中小林 育子
梅三分西洋館は水の色 町田小山 健介
淀川でおもいをとげし鯨かな 立川今野 修三
リラ冷えの町よりと書き投函す 多摩斉田 仁
一掬の水一月の湖の音 昭島坂本 空
立雛の影に添いゆく日差しかな 東久留米佐々木克子
春節や高雄夜市の水餃子 松山佐々木 凛
山の子の宝となりし桜貝 府中笹木 弘
ひとりなら先頭でビリ野に遊ぶ 調布佐藤 茉

ばんぼりに疲れきつたる桜かな 昭島佐藤 光子
銀杏散る思いの丈の高さから 杉並島 彩可
絹さやを手をに帰路急ぐ夕日して 国分寺島田 澄子
梅二輪季節の仕組違えずに 足利清水 弘一
下萌の大地に戦火幼の瞳 小平下田 峰雄
細魚喰うテレビと同じ御造で 調布白戸 麻奈
春を待つ大猫の背の丸さかな 世田谷鈴木 浮葉
白壁の甲斐の集落山眠る 立川鈴木かずえ
子の刻の空広びろと寒昂 小平鈴木 寿江
家を売る父も愛した馬酔木 咲く小金井鈴木 佑子
夏酒場バッハの小節紛れ込む 町田栖村 舞
薄氷やいつか消えぬしわだかまり 板橋諏訪部典子
青空に清々しくて 冬木立 東村山瀬尾 恵澄
曇天のあたり柔らか 辛夷の芽 小平関 梓
鳥の巢やこだまを見たと言う 青年調布芹沢 愛子
一ミリの萌黄の宇宙木の芽時 小平高瀬多佳子
巻貝に宙のひびきや 菜の花忌 武蔵野高野 公一
啄木忌文字うつくしき 反戦論 西東京高原 桐

あけぼの集

ゆらゆらとランドセルゆく四月かな清 瀬谷村 鯛夢
 荒ぶっているけど君はシャボン玉 国分寺 玉井 豊
 水槽と庭の空にも鯉泳ぐ稲 城 玉木 康博
 どん底に男がひとり敷松葉日 野 玉木 祐
 妹がゐれば活けたき合歓の花三 鷹 田山 光起
 こののちは墓守にして桜守 武蔵野 津久井紀代
 黙禱の耳に樹の芯水の音 八王子 辻 升人
 落味噲やシングルモルトと音楽会 八王子 都筑 遊
 鳩つるむ影はなりと春障子 東村山 寺尾 令子
 鶯の上手に鳴きて納税日 立 川 遠山 陽子
 今年こそ恋の一つや二つほど 西東京 戸川 晟
 紅梅白梅夫と道幅分け合えり 杉 並 飛永百合子
 太巻きの玉子のやうな児あたたか 平 塚 富山ゆたか
 朝桜鏡に二十二本の歯 清 瀬 永井 潮
 春めくや舳斗雲にはなれぬ雲 西東京 中田とも子
 せせらぎの光の和音猫柳 国 立 中野 淑子
 葉桜やマウスピースも揃いの青府 中 中矢 温
 あたたかや古きミシンに油注す 座 間 長野 保代

野も山も人の心も凍返る 武蔵野 夏目 重美
 しやぼん玉人には人の座右の銘 町 田 成戸 寿彦
 梅一輪いのちの電話つながる夜 国分寺 南行ひかる
 跨線橋より望む富嶽や太宰の忌 西東京 西川 五月
 風花や遺影に「じじ」と呼ぶ幼な世 田谷 西前 千恵
 春深き昔 渋谷に 渋谷 川 昭 島 西村 智治
 末枯れて踏み応えなき我が影法師 多 摩 拔山 裕子
 老人の歩く速さや冬の川 三 鷹 根岸 敏三
 ひな壇にたつたひとりのあかきかほ 三 鷹 根岸 操
 減塩と減糖並び 春 歩 小 平 野口 佐稔
 春休み英語教師の声色 芸 八王子 野澤 勝美
 郷土資料館が余生や古雛 羽 村 野島 正則
 虎杖を覗く昔のつぎつぎと 青 梅 萩原 美沙
 貝寄せに引かれていった片思い 武蔵野 蓮見 順子
 思い出を断ち切る海へ桜貝 武蔵野 蓮見 徳郎
 小川のつらら朝日を浴びてオシャベリ 羽 村 花貫 寥
 寒いねと猫に声かけ嫌われる多 摩 平山 道子
 空の青さを悲しんで梅咲けり 八王子 広井 和之

あけぼの集

寂しさも編み込んでをり毛糸玉 調 布 藤原はる美
 考へる露座の裸像も蘆牙も 練 馬 淵田 芥門
 冬帽子捨てて今日から自由人 八王子 冬木 喬
 じゃんけんのぼんにたんぽぽそつぽ向き 国 立 前田 弘
 冬桜一緒に遠くを見てみたい 国 立 前田 光枝
 我が母校円形校舎チューリップ 木更津 松本 まり
 春風にのり飛べぬ折鶴の黙 八王子 松元 峯子
 動物に書物のなくて春の暮 東久留米 三池 泉
 ふわふわの双子のパンダ日向ぼこ 東久留米 三池しみず
 立春や腑に落ちてくる師の言葉 東久留米 三浦 禎三
 霾や島に別れの投げテープ 小金井 三浦 土火
 少年はうまく泣けずに冬の川 世田谷 三浦 文子
 角ばったドーナツにみる凍て戦 町 田 三木 冬子
 老鷺やたつぷり聞いた耳ふたつ 国分寺 水落 清子
 色匂ふ在所の花の濃かりけり 三 鷹 水野 星間
 春雪の夜よ灼熱のマンボ日 野 満田 光生
 ひこばえに促されているわたし 昭 島 宮腰 秀子
 「会わない」が「会えない」になるしやばん玉 調 布 宮崎 斗士

漂流のあとのまどろみ花筏 小金井 村井 一枝
 先生に恋をしたころ沈丁花熱 海 望月 哲土
 ジェンダフリー人はそれぞれ雑木の芽 東村山 森本由美子
 冬星のもとにピアノという個室 三 鷹 守谷 茂泰
 今日終わるゆつくり落葉踏みしめて町 田 山崎せつ子
 薔薇活けて夫亡き部屋を明るくす 東村山 山崎美紗緒
 幻の家族そろいて春夕餉 府 中 山本 徳子
 リモートで墓参りする老いの春 八王子 山本ひまわり
 暖かや鷺小鳴く多摩の谷戸多 摩 山本みつし
 流水の海に日の出の光くる 調 布 豊 宣光
 山手線二周の家出春の月稲 城 好井 由江
 クリスマスローズ弔いという居場所 三 鷹 吉川 真実
 年の果泣くため布団被る母府 中 吉澤 利枝
 この戦終わらないのかも開花 東久留米 吉平たもつ
 春愁やパズル一つが解けぬまま 国 立 吉村春風子
 鳥帰る既読の文字を残すのみ町 田 米倉 信山
 ぐひ呑の熱爛ひとりとは愉快立 川 米澤 久子
 八十も生きて空っぽ目刺焼く青 梅 渡部 洋一

赤野 四羽

冬かもめ文庫本より軽い旅

芹沢 愛子

かもめの自由で軽やかな飛行、かもめの翼と開いた文庫本、文庫本の手軽さと小旅行、連なる連想が美しく一つの句に収斂していく。リチャード・バックの『かもめのジョナサン』を思わせる解放感が魅力的だ。『冬』の冷たさが大事と思う。

足立喜美子

仲居さんの通う月夜のワントン屋

石川 春鬼

「仲居さん」の働く料亭はお客様で賑わっている。その接待も一段落。仕事を終えて向かう所は……。「通う月夜」の措辞に因って浮き浮きと足を運ぶ姿が彷彿とくる。さぞ美味しい「ワントン屋」なのだろう。作者も足繁く通っている店なのだ。

穴原 達治

しがらみを捨てれば軽し年の暮

成戸 寿彦

何時もながら、年の瀬は何やかやと雑事が後を絶たない。まさに「シガラミ」。スツバリと捨てれば誠に、スツキリできることは解っているがこれが出来ないのが凡夫。生きるとはまことに厄介な作業が尽きない。日常の機微を詩に表した技量に感服。

新井 温子

白詰草白し出番を待つ兵器

高野 公一

ロシアによるウクライナへの侵攻を詠んでいると思う。たぐさんの国が、ウクライナへ兵器の提供をしている。掲句を読みながら恐さを感じなくなっている自分が恐い。白詰草の四つ葉を一生懸命に探した小さかった頃の記憶が蘇ってくる。

荒川勢津子

遠くまで行けさうけふの冬青空

江中 真弓

歩くことで得られる心身の健康、ストレスの解消、免疫力アップなど効果は知っていても、中々腰が上らない。常日頃歩くことを日課にしたいと思い乍ら。明るい掲句、穏やかな冬青空に今日は足を延ばせそう。

一ノ瀬順子

もう一度犬飼ふ話小六月

谷村 鯛夢

ペットは家族の一員である。以前に犬を飼っていた作者は、もう一度と思い家族に相談する。しかし躊躇するのである。犬の世話の大変さや自分の年齢の事など……。コロナ禍や戦禍の報の中、年語がよく効くほっこりとした作品である。

伊東 類

遠くまで行けさうけふの冬青空

江中 真弓

シンプルな表現こそ信条。どんより曇った日もあるが、今冬は特に青空が広がり、富士山の雪景色を拝める日も多い。そんな時は青空を掻い潜ってどこまでも行けそうな気分。作者の心情は旅好きのみならず、精神の伸びやかな飛翔をこそ願っている。

稲吉 豊

もう一度犬飼ふ話小六月

谷村 鯛夢

犬好きに取って相棒を失った喪失感は何ばかりか。当然掲句のような事になる。しかし、動物を飼うのは相棒の死を看取ることに責任を持つ事でもあり、覚悟がいる。自分の余命とのバランスもある。結局、話だけで終わったと季語が告げている。

今田 述

大方は妻の言いなり冬籠

渡部 洋一

寒い日が多い。自ら課した最低千歩の歩行も途絶えがちな冬籠もり。そうなれば奥方の天下だと作者は訴える。だがこんな句は妻に先立たれた老骨から見れば、お惚気にしか映らない。作品としてすっきりとしていることが魅力。

大井 恒行

白詰草白し出番を待つ兵器

高野 公一

シロツメクサの俗称は首宿（うまごやし）、その名にいつも、武田節を思う。「われ出陣にうれいなし／おのおの馬は飼いたるや」の歌詞のせいだ。兵器は、当然のようによろいなく出番を待っている。兵器は捨てよ！の意。

大槻 正茂

あちこちに監視カメラや虎落笛

新井 温子

虎落とは中国で虎を防ぐ柵らしいです。虎落笛は聞く者を不安にします。監視カメラは犯罪を防ぐためのものですがそれで安心してしまっているのか、とこの句は問うているようです。現代の監視社会を虎落笛を使って皮肉り警告しているようです。

岡崎たかね

巨人らに踏まれて軽し春の雲

赤野 四羽

オリンポスの神々以前に巨人族がいてゼウスに敗れたのだとか。神々は強大だったが宇宙の破壊まではやらなかった。現代の宇宙開発、宇宙軍と称するものは何なのか。核大国はみな参入し、日本のH3ロケットにも膨大なお金が…。春の雲よ永遠に。

門野ミキ子

三日月や補聴器に枯葦の声

玉木 祐

風の音、空気の音、補聴器は丹念に音を拾ってくれる。どちらかと言うとシャープな音である。それを枯葦の声と捉えた作者の発見に同感。季語を支える「三日月」も動かない。朝が来て補聴器を付けて一日が動き出す。

亀津ひのとり

裏紙に一句生まれる神無月

関 梓

季語の幹旋、という事を改めて思い知った一句。この季語を、他の季節の季語と入れ替えてみても、しっくりこない。裏紙と神無月の絶妙な取り合わせと、肩の力の抜けた、将に天から降って来た一句の感がある。

河 順子

おでん煮る皆既月食すすむ間を

根岸 操

私も同じ体験でしたので、うまくまとめられた作者に拍手です。私は夕食を作りながら、何度も外の月食の進み具合を確認し子どもの時のように興奮しました。月食が終って、当り前のように満月に戻ると、ほっとして夕食の卓を整えました。

神崎 幸子

長き夜や活字を拾うルーペかな

飯田 和子

ややマンネリのテレビ番組にも飽きて、寝る前のひとときを読書と決めている。一冊すべてを読み終えるほどの気力はなく、眠くなったら翌日に読む。老眼鏡も疲れてくると字がかすむ。手元のルーペが便利で手離せなくなった。同感です。

城内 明子

三日月や補聴器に枯葦の声

玉木 祐

補聴器に依る幽かな雑音を枯葦の声と聴く。その声は作者に何を話したのだろうか。そして作者は何と応えたのだろうか。冬三日月の光は冷たい。加齢による佝僂さが犇々と伝わる。しかし作者は枯葦に潜む温み、安らぎにも気付いているのだろうか。

小山 健介

不審者は大方手ぶら神の旅

稲吉 豊

作者の発見がある。確かに防犯カメラの不審者は手ぶらが多い。何かを手にしていれば、警察官に誰何されるだろう。陰暦一〇月は日も短くなり、警戒心は必要だが、旅を急ぐ途中の神に不敬があつてはならぬ。神様も手ぶらなのだから。

清水 弘一

うたかたの恋に終らず冬の恋

三池 泉

泡のごとく消えるはずの恋と思つたが、
今もみずみずしく触れることの出来るまご
うことなき私の恋。愛しく思う気持ちも、
恋心も決して冷めることはない。恋の定め
に従い、人生の幕が下りるまで大切に育も
うまごうことなき私の恋。モンシェリー!!

鈴木 寿江

石路の黄にこころあずけている真昼

山崎せつ子

石路の花は、良く玄關の脇、門の脇に植
えられています。寒さに負けず濃い黄の花
と濃い緑の葉をつけた家を守っているかの様
に。作者はそんな石路の花に心をあずけて
一日を過ごしている。なんと幸せな事でしょ
う。一日も早く戦争が終わりますように。

諏訪部典子

二十世紀梨齋って私の立ち位置

三木 冬子

二十世紀梨、上品な梨の高級品として認
識している。昨夏、スーパーの若い店員
さんにこれを聞いた処、知らないと言う。
二十一世紀に入つて、はや二十年、昭和・一
桁生まれの私の「立ち位置」を思い知る。「立
ち位置」と言う言葉に惹かれた。

玉木 祐

仏の座けむりのように歩きたし

前田 弘

道端でよく見かける仏の座。けむりのよ
うにが切なく伝わる。歳と共に散歩もま
ならぬ歩行に対して、ふんわり自由に歩き
たい願望が、けむりのように措けつて側々
と伝わる。季語の仏の座も仏さまに對して
の呟きのようにも受け取れ、映像も鮮明。

徳山 優子

白詰草白し出番を待つ兵器

高野 公一

いい天気の日がピクニック。お弁当を広
げていると側によく白詰草を見かけます。
そんな平和な日常から一転して、ここには
出番を待つ兵器がある。白詰草とあまりに
も懸け離れている兵器が、言いようがない
静かな狂気を生む。

夏目 重美

車椅子順路に低き返り花

永井 潮

季語の返り花が深く静かに心に染みる。
中七も見事に景を映す。十四歳の頃、共に
療養所に過ごした友人の短詩「車椅子の散
歩乾いた石を一つ拾う空の匂いのする」を
思いだした。あれから六十余年、掲句は新
たな車椅子の名句として私の記憶に残る。

南行ひかる

火星^{マルスあかあか}赫々兵戦の果てず秋

満田 光生

火星の英名はマルス・ローマ神話の軍神。
独特の赤みは血の色、臭いを想起させる。
兵戦の果てず、は露によるウ国侵略の事と
思う。秋どころか一年を超えた。七五五型、
季語秋で名詞止め。句の裏に悲しみと怒り
を感じる。日本も他人事では無い日が迫る。

西前 千恵

遠くまで行けさうけふの冬青空

江中 真弓

ぬける様な青空に、「さあがんばるぞ」と
私も元気を貰います。内外の心配事も一時
忘れて何でも出来そうな気がしてくるのが
不思議です。一日も早く世界中が平和にな
り、何処へでも出かけられる日が来る事を
願う作者のお気持ちに心から共感致します。

根岸 操

酔い覚めの空気が旨い今朝の冬

戸川 晟

きつと昨夜のお酒はいいお酒だったのだ
ろう。ちよつと深酒をしたのかもれない
がぐつすり眠り朝を迎えた。ピリリとした
空気が旨い。今日は立冬である。「今朝の冬」
が効いている。私は下戸であるが立冬が誕
生日。この句が好きになった。

広井 和之

白詰草白し出番を待つ兵器

高野 公一

白詰草は牛の餌のクローバー。今、日本の酪農畜産は、飼料やエネルギー等の価格の高騰で消滅の危機にある。背景に経済・金融失政とウクライナの戦争がある。日本でも戦争をおおる動きが急だ。白詰草の白と兵器の黒のイメージの対比に震撼した。

淵田 芥門

ひととせを生きる眉引く初鏡

城内 明子

新年の季語には初のつくものが多いが、まま月並か陳腐の句になり勝ちだ。明鏡裏、白髪に嘆息するは漢詩に古いが、掲句、初鏡に眉引くとの措辞の眉は、翠黛や蛾眉のように女性美の象徴。年頭、凜然とした女性の生き様、ひいては品格をも窺わせる。

前田 弘

冬かもめ文庫本より軽い旅

芹沢 愛子

文庫本より軽い旅を冬かもめに重ねる。見た目も小さくポケットにも収まる文庫本であるが、内容はしっかり充実していて重い。多分、作者は旅慣れているだけでなく知識も豊富。文庫本のように小さく軽く見えても急所は確実に抑えた旅を希求する。

松本 まり

望郷をただ掻き回し葛湯溶く

神崎 幸子

こんな寒い夜は、故郷の母は温かい飲物を出して呉れていた。遠い日の出来事。大人は玉子酒だけど、女子供は葛湯を掻き回してふうふうと、熱々を口に含めば少々の熱も治まる。母の掌の様な魔法の優しい飲み物。奈良の天極堂がお気に入り。

松元 峯子

部屋ひとつの母訪ぬれば蜜柑ひとつ

淵田 芥門

「部屋ひとつの母」から、介護施設に入居されている母上なのだろうか。部屋に入ると、母はいない。寒々とした部屋の机の上に、橙色の蜜柑がひとつ。色々な事情を想像させられるが、大きな喪失感と寂寥を感じるのである。

三池 泉

牡丹雪じつと見ている十五分

宮腰 秀子

雪が降るといふ予報が外れていた。大寒波が来てこの東京の端っこも積った。はじめは牡丹雪で、雪片は牡丹の花びらのようだ。十五分ぐらい過ぎると雪は本格的な細雪になり、翌日は消えてしまう。寒くても恍惚と十五分を楽しみましたことだろう。

三浦 禎三

車椅子順路に低き返り花

永井 潮

人生百年時代になりました。何かを始める時は切っ掛けがあります。私も俳句を始め約四年になります。この句は自分の身になり考えさせる事が凝縮されています。庭園を巡る車椅子の人に寄り添うような自然の優しさ。高齢化社会を考えさせられます。

三浦 文子

赤のまま今なら分かる母のこと

飛永百合子

道端で赤のままを見つけたと、何だかほっとし、やさしい気持ちになってくる。赤のままの花言葉は、「あなたのために役立つ」。筋縄ではいかない「母」への気持ち、今なら素直に思いかえすことができるのである。

三木 冬子

そぞろ歩き散りぎわ思案冬紅葉

岡崎 万寿

そぞろ歩きといった慣用語からの連想で「そぞろ生き」のゆつたり感がいいですね。高齢化が一層進み後期高齢者の仲間も増えている昨今、中七の両懸かりの表現に深く心情を重ねます。「冬紅葉」が控え目に有終の美を暗示しているかの様に思います。

水野 星闇

歲月の中に母の死草の花

津久井紀代

肉親、とりわけ母の死は重いもので、誰しも深い感慨を持つ。私の母は正のひと桁生まれで、青春と戦争が重なる世代。歲月の流れは否応なく人の記憶とその生きた記録を奪ってしまうが、掲句は季語「草の花」によって、確かな救いと慰めを得た。

満田 光生

仏の座けむりのように歩きまし

前田 弘

「けむりのように歩」くとは、地表近くの浮遊か。七種の「仏の座」は新芽、若葉を食し、その頃は丈がごく低い。視点をずつと低くすれば世界は違つて見える。浮遊できるのは神か仏だが、してみたい。仏↓(線香の)煙からの発想も楽しい。

望月 哲士

しがらみを捨てれば軽し年の暮

成戸 寿彦

年末になると殆どの方が多忙。あれこれやらなければいけない事が滞積しているのだ。考えてみればそれらのものの大部分は世のしがらみに捕らわれている為なんだという事に気付く。それを捨て去ればどんなにか身軽になれるだろうというのに共感。

山崎せつ子

ゆつくりと吹かるる烏瓜の午後

平山 道子

烏瓜が風に吹かれて揺れている。あの鮮やかな朱色が目に浮かぶ。冬枯れの中だからこそ目立つのだ。思わずそばによつてさわつてみたくなる。

烏瓜は気持ちよいのだろうかと思議に思う。鮮明な景を想像する。

山崎美紗緒

白詰草白し出番を待つ兵器

高野 公一

クローバーの名で親しまれている。昭和の少女は花輪を作ったり冠を作つて遊んだものだ。休耕田にこの花が白く咲いていたのを懐かしく思い出す。今出番を待っている兵器とは――。唯一の被爆体験国の日本人は決して視線を反らしてはならないのだ。

山本 徳子

ひもじさの歴史を綴る芋の蔓

永井 潮

ひもじい時代がありました。

芋の蔓も大切な食材であり、きんぴら等で食べました。食物と歴史はいつの世も密接であり当時のひもじさが芋蔓の如く浮かんできます。歴史を綴るとは的確な証言であり共鳴いたしました。(一四四号)

山本みつし

立冬や母の窓辺の雲厚し

田山 光起

立冬に、母を見舞つた時の句と理解(違いましたらご容赦を)。冬の始め、病窓は、厚い雲に被われ、母子の互いの心情を表わすようである。押えた「窓辺の母」厚い雲の表現が相俟つて、情感豊かな句境を醸し出して、心暖まる句である。

豊 宣光

秋扇静かに閉じて閉暮終る

長野 保代

「秋扇」ですら、作者は閉暮の勝負に負けてしまったのかもしれない。それとも、観客として勝負を見ていたのでしょうか。どちらにしても、激しい戦いを終えて緊張が一瞬ほぐれた雰囲気伝わってきます。「静かに閉じて」が効果的です。

米澤 久子

もう一度犬飼ふ話小六月

谷村 鯛夢

もう一度とは、飼っていた犬との別れがあったのです。別れの悲しみはなかなか消えないのですが、小春の日にもう一度犬と暮してみようかと話が出た。平和な穏やかな家庭像が「小六月」に見えて最高です。素敵な犬ちゃんに出会えます様。

好井 由江

雪の夜は耳にじょうずに触れてくる

宮崎 斗士

深々と降る雪の夜は、異常に耳が聴く
なっている。やさしく耳に伝わってくる音
も、それぞれの形となって浮かんでくる。
こんなことを、うつとりと楽しんだ少女の
頃を想い起こした。中七下五のやわらかな
表現が想像力をふくらます。

吉川 真実

遠くまで行けさうけふの冬青空

江中 真弓

北海道から進学で上京するまで私は東京
の空は星も見えない灰色と思い込んでいた。
が、東京の冬青空は違った。紛れもないス
カイブルー。この純粹な青を切り取って胸
にしまいたいほどだ。冬の凜とした空気の
中でこの青空に幾度力づけられたことか。

吉澤 利枝

赤のまま今なら分かる母のこと

飛永百合子

母の涙も喜びも、この年齢になって痛い
程分かってきたこと。気がつけば今の我は
曾孫もいる老婆となっている。
戦争中五人の子供を育てた母がどんな苦勞
をしていたのかは想像に難くない。句は赤
のままの優しさがとても良い。

渡部 洋一

不審者は大方手ぶら神の旅

稲吉 豊

神が出雲へ向けて旅立つことを擬人化し
陰曆十月を神の旅という。日本国中の神は
留守になる。各地で物騒な事件が相次いで
いる。防犯カメラが設置されていても、不
審者は手ぶらで来て、根刮ぎ持っていくて
しまう。お互い気をつけたいものである。

第12回 俳句研究会

12月17日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事

永井潮・秋山ふみ子・

玉木康博・山崎せつ子

石橋いろり・大森敦夫・

関 梓

参加者26名

★講話……津久井紀代氏

「有馬朗人を読み解く」

踏台を何度も使ふ十二月 水落 清子

手焙りの手が選る小銭朝の市 稲吉 豊

幸せの顔した卵おでん鍋 永井 潮

追伸の本音一行年詰まる 越前 春生

ツイッター日本語瘦せる夜寒かな 櫻本 愚草

小春日のほはハミングと化す誦経 亀津ひのとり

大皿のブロッコリー仁徳陵のごと 石橋いろり

レノンの忌自動ピアノの鳴り止まぬ 小山 健介

開戦日廊下の奥に動くもの 野口 佐稔

寂として時には凜と木守柿 吉村春風子

至福とはゆつくり開く冬薔薇 関 梓

布団干すお日様好きの猫も干す 松元 峯子

歩く人走る人みな黄落期 尾崎 太郎

山茶花やささくれの指疼きたる 秋山ふみ子

戦争のやうな靴音寒の雨 津久井紀代

冬に入る一葉一葉に違う風 山本ひまわり

隙間風夫婦別姓ベッドイン 戸川 晟

貧しくも炬燵は呵呵と大晦日 淵田 芥門

換気完 壁閑々の冬館 三浦 土火

満身に慢心冬の為政者の 依田しず子

昔日の昭和街騒ジャンルベル 石原 俊彦

冬木の芽空に向かつて叫びたる 山崎せつ子

落葉踏む林間透明白い息 玉木 康博

秩父から雪の欠片やおらが影 大森 敦夫

横跳びのゴールキーパー冬三日月 青木 隆

夜咄やお涙頂戴調美談 満田 光生

第1回 俳句研究会

1月28日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事

根岸敏三・秋山ふみ子・

玉木康博・石橋いろり・関梓・

根岸操・石原俊彦・

山本ひまわり

参加者30名

★講話に替わり出席者全員の近況報告

一片の薄氷にある風のあと 吉村春風子
空つ風更地に残る流し台 尾崎 太郎
いつか読む本を並べて去年今年 秋山ふみ子
水が出て湯の出る暮らし御慶かな 野口 佐稔
冬晴れやあつつけらかんと人の逝く 三浦 土火
たつぷりと老人になり初詣 前田 弘
厨より妻のハミング四日かな 小山 健介
凍轍父の語りし俘虜の日々 水野 星閣
寒茜輪血されゆく水平線 森本由美子
梅ふむほめあつて見る知らぬ仲 水落 清子
老人の歩く速さの冬の川 根岸 敏三
冬落暉ビルの隙間に嵌り込み 山本ひまわり
好きだから抱えて帰る葱の束 戸川 晟
追ひかける記憶のかけら寒に入る 関 梓
蠟燭とお堂の声明寒揺らす 玉木 康博
避難するとしたら葉牡丹の中 前田 光枝
枯芒まつすぐ立ちて風さがす 山崎せつ子
寒梅や百姓一揆処刑塚 満田 光生
コロナ禍も早や四年目か初暦 石原 俊彦
剥ぐ音のいさぎよきかな初暦 越前 春生
日向ぼこ袖の毛玉は目の敵 稲吉 豊
破魔矢もていくさの薔を払ひたし 亀津ひのと
まどろみの途中で春とすれちがう 佐々木克子
友よ旧臘死出の旅人になりしとぞ 淵田 芥門

第2回 俳句研究会

枯葉舞う古きシャンソン口遊ぶ 松元 峯子
寒つばき卓にほどける薔かな 根岸 操
ジャングルジム乗る子廻る子風光る 西前 千恵
厳寒の星90秒からの選択肢(終末時計) 石橋いろり
電気ガス値上りの中寒波来る 青木 隆
大寒や車のあとにまた車 大森 敦夫
2月25日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 石橋いろり・秋山ふみ子・
山崎せつ子・山本ひまわり・
満田光生

参加者27名

★講話

夏目重美氏「俳句文芸と縄文文化との邂逅試論」

大仏の見震いひとつ春寒し 石原 俊彦
日の匂い風の匂いや梅八分 松元 峯子
しらぬ間といふ刻のあり落ち椿 吉村春風子
鼻歌はダンブの窓の早春賦 山本ひまわり
寒明ける乗換駅に正誤表 前田 弘
春うれし歩きスマホの女子を抜く 野口 佐稔
多羅葉の葉うらに「へいわ」風光る 根岸 操
雪解風港の隅の倉庫寄席 小山 健介
八海山久保田澤乃井瀬祭 満田 光生
きらめいて水水鳥に食べられる 高野 公一
ふらここや老女は一人風を切る 森本由美子

147号の原稿締切日

会報「多摩のあけぼの」はこれ迄一、四、七、十月の発行でしたが、今号は編集者のアクシデントにより一カ月近く遅れてしまいました。この遅れを次号以降で少しずつ取り戻したいと思います。ご迷惑をお掛けしますが原稿の締め切りを少し早めさせていただきます。『あけぼの集』、『一句鑑賞』の締め切り
六月十日(山崎宅到着)

野火走る地の神火の神従えて 佐々木克子
べんべん草手つなぎ鬼のふと孤独 石橋いろり
一ミリの萌黄の宇宙木の芽時 高瀬多佳子
今日終る落葉ゆつくり踏みしめて 山崎せつ子
春の雪母が思ひを積むやうに 三浦 土火
よたよたと猫の這ひ出る炬燵かな 関 梓
朝食の津軽の記憶蜆汁 夏目 重美
雑踏を見はなして来た犬ふぐり 前田 光枝
ホモ・サビエンスに核の狂気や春寒し 亀津ひのと
轉や一樹に寄するベビーカー 秋山ふみ子
花ミモザ矢鱈尾を振る門の犬 稲吉 豊
春三日どこまでもゆけ999 青木 隆
夕さりて薄氷光る谷戸田跡 尾崎 太郎
状況の思うに任せぬ春の泥 戸川 晟
足痛の夫を連れ出す梅見かな 西前 千恵
幾重にも大小水輪鴨親子 根岸 敏三

あけぼの便り

○坂本空様、成戸寿彦様、前号で拙句のご鑑賞を頂き有難うございました。ご共鳴いただき作句する励みになりました。感謝申し上げます。
(荒川勢津子)

○吹く風は冷たいですが春の兆しを感じるこの頃です。散策の遊歩道からは路の臺が顔を出しています。先日路の臺を頂き春を味わいました。
(一ノ瀬順子)

○第一美術展に30年ほど出品しています。今年も老骨を叱咤勉励「連山冠雪」60号を出します。国立新美術館にて5/31から6/12まで(6/6は休館)。ご関心あれば招待状を差し上げます。(今田述)

○編集部の皆様いつもご苦勞様です。浅春の候、私の一番好きな季節です。独り吟行で足を伸ばします。(亀津ひのとり)

○現代の俳句は「うまさ」を優先の句が多い。老後は、なんとか下手になりたいものだ。
(川島一夫)

○前号の巻頭エッセイ、歌人・今野寿美さんの文がいい。ことに前半の石牟礼道子さんの句に触れながらの俳句論はすぐれている。一ページ下段は書き出しから圧倒してきた。全文OK。編集部も頑張っ

た。両者に謝す。

(川名つぎお)

○如月はまだまだ寒いですが、春はもうすぐそこに手のふれる所へ。今日は立春お雛様の額(友禅染)を飾りました。しばらく楽しみます。
(佐々木克子)

○一月二十八日「プラタモリ」で足利市の饅阿寺(ばんなじ)、足利学校等が紹介されました。思い掛けない古い仲間からのメールやラインでの交信で親交が復活しました。
(清水弘二)

○字賀いせを様、前号で拙句をご鑑賞頂きありがとうございます。年を重ねても表現のむずかしさをつくづく感じる此の頃です。
(鈴木かずえ)

○前号の巻頭文「近くて違う俳句と短歌」難しい理屈はなく素直に読ませていただきました。歳と共に文章がスウィートと頭に入らず何度も読み直しても更に混沌とすることが多くなりました。納得してゆっくり読みました。
(玉木祐)

○皆様のお世話になってここまで(87才)これたのを感謝しております。余命ある限り子供たちに戦のおろかさを語りついで行くつもりです。これからもよろしく!!
(寺尾令子)

○三寒四温の季節ですね。家にばかりいるとなかなか俳句も出来ません。あけぼの

集の皆様の俳句に刺激を受けております。
(飛永百合子)

○昨年に俳句研究会で講話をした縁で「多摩のあけぼの」を頂いています。現代俳句協会の会員ですが多摩地区の会員ではありません。近詠を投句します。住所変更しています
(富山ゆたか)

○この極寒を乗り切れば桃の花が咲き待望の桜の花に会えます。大きな大きな楽しみです。
(中田とも子)

○三月は男女の孫の大学卒業、末孫の高校卒業、四月は男女二人の就職そして末孫の大学入学と私のへそくりも底をつきそうです。
(西前千恵)

○七十才になって退職しました。これからもう少しお願いします。
(西村智治)

○中條啓子様、蓮見徳郎様、前号で拙句ご鑑賞を頂き有難うございました。句が生き生きと動いた様に思えます。これを励みに一層努力して参ります。
(拔山裕子)

○三池しみず様、前号で私の藻刈舟の句を採って下さりありがとうございます。井の頭の池を定期的に清掃しているようです。
(根岸敏三)

○多摩地区の全員の絆である『多摩のあけぼの』今年もみなさまの協力で手元に。行事、投句に多くの方の協力を願いま

す。

(根岸操)

○相次ぐ物価値上げ、とりわけ電気代の高騰に春愁などと言っていられないですね。無謀な戦争が続き、巨大地震が起き、国内では犯罪が多発しています。どうみても世の中良い方向に行っていないですね。せめて俳句で自分を元気づけたいと思っています。いつもお世話になり感謝です。

(野口佐穂)

○初めての投句です。よろしくお願いいたします。

(野島正則)

○満九十一歳になり、俳句はおろか通常の文章も書けなくなりました。鑑賞文の依頼がありました。失礼いたします。

(花貫夢)

○漸くコロナも収束の気配。運営幹事各位のご苦勞にあためて謝意を申し上げます。小生、縁あって当会に加入して十有五年。当時の幹部は、天上人となられた柏田さんのほかは、その年数分の歳を重ねられて愈々ご健勝だ。各位と当会の栄を心からお祈りする。

(淵田芥門)

○大寒の日に、東京湾のアクアライン木更津寄りに鯨が潮を吹いているのをみつけTVや新聞に載りました。海苔はチヌ(黒鯛)が食べ不漁です。昨今はカキの養殖に力を入れて、昔のフェリー発着所

跡の水産売り場で売っています。今年も良い一年で過ごせます様に祈念いたします。感謝。

(松本まり)

○武藤幹様、拙句を取り上げてご鑑賞頂き、誠に有難うございました。これからの句作りの励みになります。今後とも宜しくお願い申し上げます。

(三浦慎三)

○ロシアのウクライナ侵攻から一年。プーチン大統領による大義なき軍事侵攻はとてつもなく市街を破壊し多くの市民が被害を受けています。この現実には暗澹たる思いがします。

(三木冬子)

○永井潮様から入院して手術をしますと電話を頂きました。心からお見舞いを申し上げます。一日も早い全快をお祈り致します。在宅句会では大変お世話になります。ありがとうございます。

(水落清子)

○退職して一年、時間があれば句が出来る訳ではないことがよく分かりました。月例の席題句会だと一時間で十句作れるのに、家では全然駄目。自然に句が出来るという「天才」にこれまで数人会いしましたが、凡人の私はこつこつ作句するしかありません。

(満田光生)

○コロナ禍そしてインフルエンザの為外出も控えめにしていますが、暖かくなりよい季節になりましたら句会に出席し皆

様とお会いしたいです。よろしくお願い致します。

(宮腰秀子)

○まだ新米ですが、今後ともよろしく願い申し上げます。

(森本由美子)

○春は名のみ、まだまだ寒い日があります。くれぐれもご自愛下さいませ。

(好井由江)

○職場の大先輩で退職後も懇意にしてくださった方が先日亡くなられ悲しみにくれておりました。私とは母ほど年が離れている方でしたが若々しくユーモアもあつて日帰りバス旅も一緒にしたり楽しい思い出ばかり蘇ります。お花が好きだったその方を想い今回の句を詠みました。

(吉川真美)

○コロナ禍や体調の悪さ、おまけに九十才近い老人ですから、なかなか句会には参加できず失礼しております。皆様お健やかにお過ごし下さいませ。

(吉澤利枝)

○青木一郎様、前号にて拙句のご鑑賞ありがとうございます。ウォーキングの途中丸坊主にされてしまった街路樹の銀杏を見て、そこ迄するのかと思つて出来た一句です。草の芽木の芽が活動を始めました。負けずに俳句を楽しみたいと思っています。

(米澤久子)

作品募集

投句締切は
7月31日
(必着)

応募規定 3句(組)・2千円 何組でも可
ただし、新作未発表作品に限る。「3組
9句同時投句に限り、6千円を5千円に
いたします」

前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、
お名前、電話番号、協会員・会員外の別
を明記。投句料は普通為替、定額小為替
(無記名で)、現金書留(必ず作品同封の
事)、又は郵便払込(郵便局の青い払込取
扱票をお使い下さい)加入者名・現代俳
句協会、振替口座番号・001600-6
-52603・振替払込受領証のコピー
を投句用紙に必ず貼付してください。

【送付先】 〒101-0021 東京都千代田区外神田
6-15-4 偕楽ビル外神田7階 一般社団
法人 現代俳句協会全国大会係
☎03-3839-8190

【締切】 7月31日必着

【顕彰】 協会の会員誌『現代俳句』に優秀
作品を発表するほか、協会刊行物に採録。

【賞】 大会賞、後援団体賞、特別選者賞、
秀逸賞、佳作賞。

【全国大会】
令和5年11月3日(金・祝)午後一時より
「東天紅」上野店 〒110-8707 東京都台東区
池之端1-4-1 ☎03-3828-5111

【記念講演】 赤坂憲雄先生(民俗学者)
「あくまで文学的な、武蔵野語り(仮題)」

【講評】 中村和弘会長はじめ協会幹部
【懇親会】 午後5時より(会費8千円)

植田	浦川	江中	大井	大類	岡田	岡部	尾崎	恩田	春日	加藤	鹿窪	川崎	川名	川崎	川崎	河村	木村	黒岩	桑野	神藤	小藤	小川	衣川	坂井	佐藤	佐藤	塩野	清木	鈴水	関鹿	関戸	根美
安智	聡弓	真行	恒鬼	雄鬼	耕治	榮一	竹詩	布潤	石疼	知子	青樹	太郎	智香	正浩	聡雄	徳将	徳将	和希	紗希	昌治	貴治	次郎	弘司	直彦	文彦	正美	仁美	逍正	呂正	智子	道子	
瀬間	曾十	高岡	高岡	高岡	高岡	高岡	滝浪	堅阿	田中	田中	谷口	田村	千田	月森	津久	津高	仲高	長井	中里	中里	永瀬	中村	名久	名久	並井	成田	西谷	橋本	花谷	花房	羽村	
宣陽	原田	播磨	久行	福富	福富	武上	星野	堀内	堀内	松城	松田	松本	味本	宮崎	武藤	村松	森須	森野	山口	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	
雅子	要子	窪鷹	保徳	弘明	弘明	弘明	昌彦	長何	季何	佐和	雅世	雅世	昭二	斗次	紀子	二子	康寿	蘭寿	木稔	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	貴生	
林桂	原田	播磨	久行	福富	福富	武上	星野	堀内	堀内	松城	松田	松本	味本	宮崎	武藤	村松	森須	森野	山口	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎		

◆注意 応募規定に違反した場合は、発表後でも入賞を取り消すことがあります。

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(意見幹事担当)

「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

○令和五年度定時総会は3月12日(日) 2時から武蔵野スイングホールで開催され、議案はすべて承認可決されました。出席者数36名 詳細は147号でお知らせします。

○本部の法人化にあたり、「令和5年4月以降に入会する正会員」については、自動的に地区に所属することはなくなり、地区に所属するか意思確認を行うこととなります。従来の会員については、変更ありません。

★会員の現況(4月末現在)

233名(正会員190名・一般会員43名)

☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員

*西川五月(西東京市) *木村 菊(日野市)

(他地区より転入)

*今井まさ子(西東京市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料。それ以外の方は年会費2千円です。

お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)

永井 潮(潮)

◇◇◇ご案内◇◇◇

俳句研究会

第5回 5月13日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 林 誠司 氏

第6回 6月17日(土) 午後1時

武蔵野市かたらいの道・市民スペース

三鷹駅北口徒歩3分

(とじ込みはがきの地図参照)

*講話 参加者の懇談

第7回 7月15日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 未定

(いずれも会費五百円、出句三句)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

ポットとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆五月は私の一番好きな月。花も緑も光る風の中で伸びやかに命を紡いでいる。老いの身には眩しすぎる景ではあるが、句を詠もう。(梓) ☆永井潮さんが退院後すぐに編集にかかられ無事発行。頭が下がる。同時に、大きな負担をおかけしていたことを改めて痛感、反省した。(光) ☆新緑が庭一面に眩しく輝いている。しかし日々気温の高低差が激しく、体がついていくのが大変です。上着を脱いだり着たり忙しい。(百) ☆一句鑑賞の原稿は沢山頂いておりますが「あけぼの集」の葉書が最近少し減りぎみです。ぜひ毎号欠かさずに投句をお願いします。(せ) ☆年初から手足にマヒが生じ、頸椎の手術を受けて二カ月間入院、編集が滞ってしまった。発行が遅れたことお詫びいたします。147号の原稿の締め切りが短くなりますがよろしくお願ひします。歩行器や杖に頼る日々です。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和五年五月二十日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-10-7 大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

FAX 0422-3010934

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-62002626